



礼拝堂献堂式（昭和5年10月13日）

玉川学園は開校以来、全人教育の主張・普及、オーストリア・スキーやデンマーク体操の日本への導入など、わが国の教育界に多大な貢献をしてきた。今年、教育博物館企画展は学園創立75周年を迎えるにあたり、本館と総務部DTP制作課に残された写真から75年の学園の歩みをふり振り返り、本学の創立理念を再確認したいと思う。『玉川学園五十年史 写真編』のあとがきに写真資料が約30万点あることが述べられている。創立当初からの写真記録がこのようにあまた残されていることは、創立者が将来を広く見通す優れた見識を持っていたことを改めて知らされるものである。それは写真を通してありのままの姿を伝えようとし、写真の伝える事実の意味を見る者に具体的に理解させようとする教育者としての姿勢であろう。写真記録に残された友人知人、そして、教職員たちの姿を見つけていただければ幸いである。

75年の歩みを4期に分けて、とりあげる出来事について概観してみよう。

■昭和4年の開校から終戦の昭和20年8月を開拓期とした。小原國芳はこれまでの教育実践の充実・発展・完成・延長をめざし、新たに宗教教育と労作教育を取り入れた。さらに出版部創設、スキーのシュナイダーやデンマーク体操のニルス・ブックの招聘、教育研究会を開催、芸術教育に取り組んだ。第二次世界大戦の勃発等、苦難の中で玉川教育の根幹となることを創始した時期であった。



昭和4・5年頃の労作（道普請）のようす



自然の中で小原先生の話（昭和5年頃）

■昭和20年8月から昭和33年を新生期とする。新生日本は教育立国にありと教育行脚や教育研究会の再開。旧制玉川大学認可による念願の一貫教育を完成。さらに新制大学への移行や新設、新学制による中学部、高等部の設置。戦後の新しい世の中での全人教育のあり方を具現化させ、現在の玉川教育の土台を固めた時期であった。

■昭和34年から平成7年を拡充期とする。この時期、大学・女子短期大学に新学部や学科、大学院の文農工学の各研究科を新設し総合大学へと構築。その後、昭和48年5月、小原哲郎は理事長・園長・学長に、小原國芳は総長に就任。しかし、創立50年を目前にして創立者小原國芳夫妻が召天。悲しみにひたるまもなく創立50周年記念事業を遂行させ、国際教育の進展を図るためカナダでの教育活動を開始する。全人教育を基調として、学術・教育の研究を推進する「玉川学園学術教育研究所」を設置した。また、すべての校舎の鉄筋化など学校施設を充実させた。平成6年4月、小原芳明は理事長・園長・学長に、小原哲郎は総長に就任。玉川教育の質を拡充させた時期となった。

■平成8年から本年までを躍進期とした。21世紀を目前にし、新しい時代の教育のあり方が問われた。地球環境問題について全学園で実践することを目標にしてISO14001の認証を受け、ソーラーカー開発にも拍車がかかった。高等教育部門では21世紀の大学運営を構築させるために大学各学部の学科再編や改革を行う。そのような中で学術研究所脳科学研究施設の「全人的人間科学プログラム」が文部科学省から21世紀COEプログラムの認定をうけ、学校運営への大きな励みとなる。初等中等教育部門ではいち早く学校と家庭と子どもを結ぶコンピュータ・ネットワークを開始し、理科教育の発展を図るために科学棟を建設。さらに授業5日制を唱え、従来六三三制を四四四制に移行することを宣言した。期間的には短い21世紀における全人教育のあり方を求めた時期である。

(しらやなぎひろゆき／教育博物館学芸員)